◆薬　局

薬局長　和田匡央

2005年度薬局スタッフは、2004年度同様、薬剤師４名、事務員１名の計５名であった（但し、薬剤師１名、熊本病院スタッフとのローテーション有り）。

2005年度は、病院機能評価（Ver. 5）受審に向けた薬局業務の再構築を柱に、外来処方調剤を中心とした調剤業務及び注射支給業務、入院患者の薬歴管理・服薬指導を中心とした病棟業務および医薬品在庫管理業務に取り組んだ。

【調剤業務および注射支給業務】

2005年度も外来処方箋調剤業務が中心であったが、高齢者が多い現状、服薬コンプライアンス向上のため、また可能な限り患者のニーズに答えるべく、一包化調剤が増加傾向にあった。このため、一部には待ち時間が発生することもあったが、状況を説明しご理解頂きながら比較的満足度の高い外来対応ができたと考える。ただ、接遇に関するご指摘もあり、この点は反省し、今後改善していけるよう努めていきたい。入院処方調剤については、定期処方の確立と薬歴管理の徹底、及び看護師をはじめとする病棟スタッフとの連携強化により、誤薬、処方漏れの防止など、医薬品の適正使用に貢献できたと考える。また、2004年度後半より導入した「簡易懸濁法」が軌道にのり、機能性・効率性の高い業務ができた。なお、これらの業務については、医師、看護師、コメディカルスタッフ等の協力のもと実践できたものであり、当院の特徴とする組織力の強さであり、今後も各部署間のさらなる連携強化に取り組んでいきたい。

注射支給業務に関しては、これまで同様、バンコマイシン投与全患者のＴＤＭ実施。また、混注業務を看護部にて実施している現状、配合変化表等の情報提供等を継続し、注射薬の適正使用に努めた。2005年７月からは抗菌薬の使用量、投与患者数および及び投与日数の集計を開始。院内感染対策・防止委員会へ毎月報告し、今後当院における感染対策のデータとして活用できるよう対応していく。

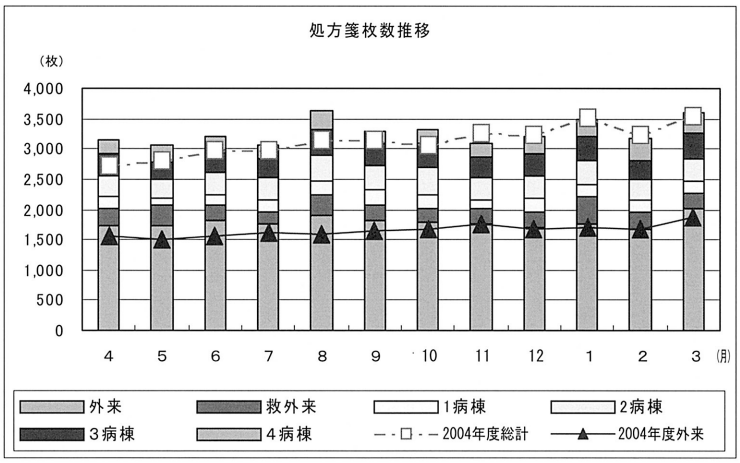
【医薬品在庫管理業務】

2005年度も、済生会熊本病院との連携をとり、コスト削減を行った。原則週２回の発注管理において、在庫切れを最小限にし、かつデッドストック防止に努めた。また、2006年４月の薬価改正を鑑み、2005年度末在庫を最小限に抑えるべく管理し、経費削減に努めた。また、薬事委員会への関与及び医局会への参加による不動在庫等の使用促進に努めた。

【病棟業務】

回復期リハビリテーション病棟を除く１～３病棟（全100床）に、薬剤師（兼務）３名を配置し病棟業務に携わった。なお、必要に応じて回復期リハ病棟の患者へも服薬指導等行った。病棟業務の本来の目的は、医薬品の適正使用の促進であるが、薬剤管理指導件数においても、外来調剤業務等、その他の業務が増加している中、月平均100件を達成することができ、2004年度の実績を上回ることができた。その他、糖尿病教室や、2005年度より NST 回診、ICT 回診にも参画。今後も、適正な医薬品の使用促進を図り、安全な医療を提供できるよう病棟業務に取り組んで行きたい。

【その他】

薬剤師の能力向上のため、昨年度に引き続き部内担当持ち回りで、定期的に勉強会を開催。また看護師向けに４回、各薬剤師が講師となり、医薬品に関する講演を行うことができた。その他、ＤＩニュース発行をはじめとする医薬品に関する情報提供を適宜行った。

最後に、2006年度は、中堅薬剤師２名の熊本病院への異動に伴い、当院採用の薬剤師２名を迎え入れ、さらに若いスタッフとなる。また、病院機能評価（Ver. 5）受審という重要なイベントを目前に控え、多忙な1年になることが予想される。その中で、適正な医薬品の継続提供とリスクマネージメントへのさらなる強化を大きな目標に、創意工夫しながら各種業務に取り組んでいきたい。